

私たちは、ジョモケニアッタ農工大学の園芸学科長 Njue Mugai 先生のご案内で、昨年11月15日、Nairobi から 100 km ほど北にある Embu 地域の酸性土壌を視察しました。また、週末には、Maasai Mara 自然保護区を訪問しました。その時に見聞きしたことを報告します。季節はちょうど Short rain と呼ばれる雨期。緑の美しい季節でした。

Mugai 先生は、植物栄養学と土壌学を専門とし、酸性土壌の改良と酸性土壌耐性作物の研究をされています。特に、ケニアに豊富にある石灰を用いて酸性土壌を適正に中和する条件を確立し地域の農民に普及することで作物生産性の向上を目指しています。そのような研究の過程で、土壌の酸性度が緩和するにつれ野生植物や土壌動物の多様性が著しく向上することを見いだされました。それらの野生植物 5 種を倉敷に持参し、昨年 8 月から 9 月にかけて、共同研究として植物成長制御グループのメンバーとともに酸性土壌に多いアルミニウムイオンへの耐性度や有機酸放出などの応答反応を解析しました。そのような関わりから、このたびのケニア訪問では、Mugai 先生の研究圃場がある Embu 地域を視察しました。

ケニア共和国の主要な輸出品は、茶、コーヒー、切り花、果物、ナッツ類です。Nairobi から Embu にかけても、車窓から一面に広がるコーヒーやパイナップルのプランテーションをみる事が出来ましたし、Embu 地域では、丘の斜面が一面の茶畑でした（図 1）。この地域は、赤道直下にもかかわらず高地であることから、年間を通して 25°C 前後の適温で降水量もあり、作物の生産性の高い地域です。Embu 地域は、ケニア山(死火山)の麓にあり、酸性土壌を好む茶の栽培には適しています。しかし、主要穀物のトウモロコシや豆の生産性は低く、その改善のために、Mugai 先生は石灰資材を用いた土壌改良の基準作りを行うとともに、大学院生の James Njeru 君とともに一定区画のすべての野生植物や土壌動物について調べ上げ、土壌の酸性度の変化に伴う生物多様性の変化について明らかにされました（図 2, 3）。

図 1 斜面はみな茶畑



図 2 酸性土壌はシダばかり



図 3 中和して多様性激増



Embu の酸性土壌を訪問した夜は、Mugai 先生のご親戚の家で伝統の家庭料理をご馳走になりました(図4)。主食は、白いトウモロコシの粉を練ったウガリと呼ばれるものですが、副食にはメインディッシュの山羊肉のロースト、それに豆の煮たものに里芋やカボチャの葉を刻み込んだものや、ケール、バナナ、サツマイモ、里芋の茹でたものがでました(図5, 6)。調味料は塩だけで、素材を味わう大変健康的な食べ物でした。飲み物もお手製です。まずは、やや甘みのある白い飲物がでました。Ucuru と呼ばれ、飲物と言うより食べ物らしいのですが、黍とソルガムの粉を石臼でひいて乳状にした後 2 日ほど発酵させたものです(図7)。これを上手に作れないと“お嫁に行けない”そうです。最後に登場したのが Muratina と呼ぶ地酒。韓国のマッコリに似た濁り酒で少し酸味があります。作り方がおもしろい。Muratina という植物のヘチマのような実の中には酵母菌が居るそうで、この実を乾燥させたものを蜂蜜とサトウキビの絞り汁に漬けて 3 日から 4 日温めておくとお酒になるそうです。このお酒、主人は大きい瓢箪にいれて客人に勧めます。倉敷では極めて控えめであった Mugai 先生が、ここでは大変な威厳を持って「男なら飲め」とばかり、少々引いている日本人諸君のコップになみなみとついで勧めました(図8, 9)。ちなみに、主人から勧められたお酒が飲めないときはどうするか？Mugai 先生は、「外にいる先祖にあげよ」と言いました。すなわち、土に戻すのです。振り返ってみると、いつの間にか外は漆黒の闇。そうか。。この闇の中には先祖の霊がたくさんいて遠来の客を珍しげに見ていたに違いありません。このお酒を頂いた夜は久々に熟睡でき、翌日に全く残りませんでした。

この Embu からはケニア山を見ることができました。標高 5199m。アフリカ第二の山。幸運なことに、長い稜線にひときわ高く聳え立つ頂上を、夕暮れ前の透明な空にくっきりと見る事ができました(図10)。この地域も、もとはといえば Maasai 族の土地です。Maasai の人々は、ケニア山の頂上を聖地と崇め、人が亡くなると頂の方に頭を向けて吊ったといひます。

図4 庭に面したところで夕食

図5 山羊肉のローストとウガリ

図6 ケール、豆、バナナ、薩摩芋、里芋



図7 Ucuru が作れなければ!



図8 元気が良い且原・前川両先生



図9 Muratina を勧める Mugai 先生



さて、Maasai 族は、その盾と槍が国旗になっているように、尊敬されている部族です。ケニアでは、キクユ族、ルイヤ族、ルオー族等がメジャーですが、一人でライオンに立ち向かう勇敢な Maasai は、東アフリカの人々を奴隷商人から救ったことから尊敬されていると聞きました。Maasai の人々は赤い布をまとっています。この色は茶色と緑のサバンナの中では一際目立つ色であり、この色を見ると野生動物は近づかないといえます。

Maasai の話をもう少ししましょう。Maasai の人々の財産は牛です。彼らは牛の遊牧で生計を立てています。放牧で育った肉は美味で売ると高い値がつきます。Maasai の村を訪問しました。村は柵で囲まれた環状で、柵の内側に沿って小さな家が並んでおり、真ん中は広場です。家は木と草と土と牛糞で作ります(図 11)。牛を 10 頭ほど持つようになるとそれでお嫁さんを迎え家を建てることのできるようです。Maasai はイスラム教徒で一夫多妻ですから、お嫁さんの数だけ家が建ちます。一人のお嫁さんとその子供が一つ屋根の下に暮らすことで、お嫁さん同士の問題が起こらないように工夫されています(図 12)。Maasai の村は、水道も電気も無いサバンナの中。火は伝統的な方法で熾し、家の中は昼でも真っ暗。それでも、暖炉があって暖かく、狭いながらも土間を囲んで夫婦と子供達の寝室がそれぞれあり、夜は山羊などの家畜を土間に入れて一緒に眠ります。また、外で飼っている牛も夜は村の広場に入れ、野獣から守るために若者は夜警をします。

Maasai の人々の大事な食べ物は牛の乳。牛の血も貴重なもので、牛を殺さず少しずつ血を採ってすすります。また、果物や蜂蜜を採ってきて食べると聞きました。なお、Maasai の人々は野生動物を食べることは致しません。

近年、Maasai の子供達も英語を勉強するようになりました。ケニア政府が初等教育を無料にしたことから、Maasai の村の横にも小さな建物をたて英語を学ん

でいます。これは画期的なことで、おかげで **Maasai** の人々は外の世界と直接コミュニケーション出来るようになりました。

その結果、**Maasai** の青年達は、放牧以外にホテルなどで働くことも出来るようになりました。国立公園や保護区などのホテルでは、宿泊客の安全確保のために夜警が行われていますが、これは **Maasai** の青年にとってはお手の物でしょう。私が宿泊した **Nakuru** 湖畔のホテルでも、夜ロッジに向かって一人で歩いていると、どこからともなく **Maasai** の青年が現れ、エスコートしてくれました。その道すがら話をすることができ、彼らの知性やモラルの高さを感じることができました。彼らに教えてもらったことの一つを最後にご紹介しましょう。**Maasai** の人々はサバンナの野生動物を恐れず、一人一人が（女性も子供も）何時間もかけて歩いて行きます。一方、サバンナには元気なシマウマがたくさんいるではありませんか。「どうしてシマウマを捕まえて乗らないの？」答えは、「シマウマの背骨は弱くてすぐに潰れてしまうから」でした。

(2011年1月31日記)

図 10 ケニヤ山のピークが見える

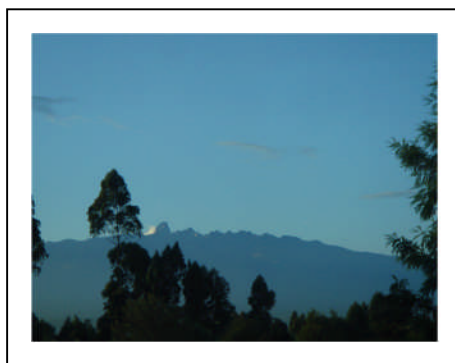


図 11 長老を囲んで。後ろは住宅。



図 12 **Maasai** の若いお嫁さん

